神戸・南京をむすぶ会・講演会
「東アジアの片隅の抗日戦争」
講師：木田信正さん（神戸学院大学大学院生）

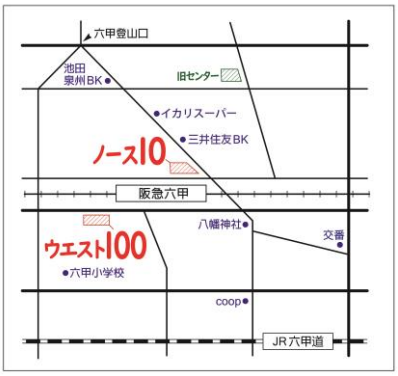
神戸・南京をむすぶ会の今夏の訪中も中止となりました。残念です。
神戸学院大学で修士論文「蛍石からみる近代日本の軍需産業と日中抗争史」を書かれた木田信正さんをお迎えして講演会を開催します。木田さんは、論文要旨の部分で次のように述べています。

本研究は「中国産蛍石をめぐる近代日本の軍需産業の発展戦略」と「東アジアの片隅の抗日戦争」の二部構成からなる。前者に関する蛍石と軍需産業の直接的研究の蓄積は多くない。そこで近代日本の軍需産業、アルミニウム製錬、ジュラルミンの開発の個々の先行研究を順に解析することにより、蛍石との相互関係を解いてみる。零式艦上戦闘機を誕生させた近代日本の軍需産業の発展戦略に貢献したのは、アルミニウム製錬の副原料・資材である氷晶石・フッ化アルミニウムの原料である蛍石であった。蛍石は日本の軍需産業と国家戦略の方向性を決定づけることになる。そして、日本として蛍石を浙江省武義県に一極集中して侵略するという形を以って取得することになる。
日本は軍需産業のさらなる発展を目指し、国家戦力の増強、資源開発と資源取得のために中国に目をむけて侵略を推し進めることになる。その時代背景の中で本研究の考察を進撲させる過程において、大きく分けて2つ発見を明らかにした。次の通りである。
（１）アルミニウム製錬の中核を担ったのは、アルミニウム製錬の主原料(アルミナ)ではなく、副原料・資材となる蛍石を原料とした氷晶石およびフッ化アルミニウムである。それが超々ジュラルミンを誕生させた。
（２）上海・南京・武漢;重慶へのメインの侵略ルートではなく、蛍石略奪にターゲットを変更したことにより「資源の戦争」が大陸の片隅で勃発する。
日本軍のアルミニウム製錬における副原料・資材である蛍石の獲得のための侵略ならびにあまり知られていない大陸の片隅で起こった抗日戦争は、一旦始まると終わることができない泥沼戦争であり、一言でまとめるならば、倉沢愛子(2021)が述べる「資源の戦争」であり、ならびに許金生(2010)が述べる「以戦養戦」であるといえる。

講演会では、論文の後半部分「東アジアの片隅の抗日戦争」のお話をうかがいます。ふるってご参加ください。

■日時　2023年5月22日（月）午後6時30分～8時30分

■会場　神戸学生青年センターウエスト100会議室A（1階）
（阪急六甲駅下車、線路南を西へ100メートル）
〒657-0051 神戸市灘区八幡町4-9-22
TEL 078-891-3018 FAX 078-891-3019



■参加費　５００円
事前申し込みは不要です。当日、会場でお支払いください。

主催：神戸・南京をむすぶ会
（代表：宮内陽子、副代表：門永秀次、林伯耀、事務局長：飛田雄一）

〒657-0051 神戸市灘区八幡町4-9-22　神戸学生青年センター内／
TEL 078-891-3018 FAX 078-891-3019／
ホームページ　https://ksyc.jp/nankin/　e-mail　hida@ksyc.jp

後援：神戸学生青年センター